

あすなろ

第 10 号

発行 弘前大学教育学部
同窓会
〒036 弘前市大字文京町 1
TEL. 0172 (36) 2111代表
編集事務局
弘前市大字高杉字五反田191
北辰中学校内
TEL. 0172 (95) 2019



組織の活性、強化を



同窓会長
太田 薫

「明けまして、おめでとうございます。」
昭和に別れをつけ、平成へと新しく門出をするにあたって、会員の皆様に心からお喜び申し上げます。

母校である教育学部は、本年度は教育指導センター関係の校舎が新築されるなど、遂年、充実されておりますことは、まことにご同慶の至りでございます。

一方また、学部卒業生も本年度で三十七回、一万余名に及び、現在、県内の学校現場や教育行政にタッチしている会員は、約六千余名を数え半分を占めております。

それだけに、世の中の期待に答えるように努力し、専門職にふさわしいように、己れを律することが必要であるかと思っております。

別に虚勢をはる積りは毛頭ありませんが、子どもに慕われる、好かれる、頼りにされる教師がただ今、求められているような気がしてなりません……。

今まで推進してきました支部組織の強化の面では、一応の目的を達成しておりますが、課題の残されている支部のあるのも事実でございます。それ故、本年度はその点の解消のために、役員及び会員のみなさまのご協力を切に要望する次第であります。

(平成元年、二月)

新しい年を迎え、同窓会会員の皆様には、ますますご健勝にてご活躍のことと存じます。

さて、小生、昨年の四月以来、竹内先生の後を承けて、教育学部長の重責を担っております。生来不敏で怠け者の小生には、忙がしくきつい仕事ではあります。与えられた仕事にはできる限りの力を尽す所存ですので、前学部長と同様、ご協力とお引き立てのほどをお願い申し上げます。



新年のご挨拶

教育学部長 大内 五介

弘前大学も、本年五月三十一日をもって四十周年を迎えます。その歳月の間の変化にはかなりのものがありますので、古い卒業生の方は、是非お立ち寄りの上、自分の目で確かめて頂きたいと思えます。教育学部の同窓生も一万人を超えて、教育界を初めとし、各界で活躍しております。そして、所々で、教育学部の卒業生は優秀であるという、心からの評価を耳にするにつけ、つくづく教師冥利を感じます。

昨年度の大きな出来ごとは、前学部長

の努力により、附属教育実践研究指導センターの設置が認められ、純増教官の一名を加え、教官室員が九十四名になったことでした。

目下公募中のセンター教官も間もなく決って、四月に赴任し、活動を開始することと思います。

残念なことに、センターの建物はまだ建っておりませんが、それも今年度中には新営されるものと期待しております。

次に、学部の将来計画について考え

ば、当面の最大の課題は、何と言っても大学院修士課程の設置です。

弘大の教育学部は、その歴史的経緯から、殆どの教室の教官定員数が、大学院設置基準に満たないという、極めて苦しい状況にあります。しかし、福島大、宮教大、秋田大と続々大学院が設置されている今、ひとり弘大のみが大学院無しで進むという訳には参りません。

どんな困難があろうと、学部の将来のために大学院を設置しようと、懸命の努力を続けているところで。

大学院設置が間近になりますと、文部省と折衝のための旅費の他、提出書類の作成のためだけでも数千円の経費を要するのが通例です。

それらの経費を学部予算のみから支出するには限界がありますので、同窓会から、その面でのご援助も仰ぎたいと、虫のよい事を願っております。

大学院設置は、学部創設以来の大事業になりますので、何とぞご理解のうえ、

全面的にご協力のほどを切にお願い申し上げます。

また、初任者研修の導入とともに、学部の教育実習に協力を得難い状況が生れつつありますが、後輩たちが皆さんの優れた足跡を継ぐためにも、この面でのご協力もお願い申し上げます。

お願いばかりになりましたが、最後に、皆様の一層のご活躍を祈り、かつ期待しております。

昭和63年度 定時総会

昭和六十三年年度、教育学部同窓会の総会は左記の日程により開催されました。

- 一、日時 五月七日(土) 午後三時
- 二、場所 弘前市百石町 大和家
- 三、次第

- a 開会のことは
- b 会長 あいさつ
- c 教育学部長 祝辞
- d 議事
- イ 庶務報告
- ロ 監査報告
- ハ 昭和六十二年度決算報告
- ニ 会則審議
- ホ 昭和六十三年度事業計画
- ヘ 昭和六十三年度予算審議
- ト その他
- e 閉会のことば

総会には、教育学部より大内学部長、石田事務長の来賓をはじめ、太田会長、県内各支部より約三十名の役員及び会員が出席され、一年ぶりにお互いに久闊を叙しながら、同窓会の方向づけについて熱心に討議がなされた。

役員一覧

- 会長 太田 薫(弘前大富町)
- 副会長 柿崎忠雄(青森西中)
- 高田 明(八戸長者小)
- 釜 范 裕(五所川原小)
- 花田陽音(青森高)
- 工藤睦雄(教育学部)
- 長内耕三(弘前松原小)
- 塩原鉄郎(教育学部)
- 高岡 實(弘前北辰中)
- 事務局長
- 会計監査
- 監査



思い出

八戸北高校々長 塚原良一

私が弘大教育学部に入学したのは昭和二十四年の夏のこと、それは新制度の大学の発足が遅れたためである。そのため、一学期の不足分を補うために授業が冬休みを返上して行なわれた。

一期生は、既に教職経験のある人、師範からきた人、新制高校からきた人さまざまであった。戦中、戦後の混乱期を過ごした私達は基礎的、系統的知識に欠けていたが、それだけに、戦争による不勉強を取り返そうと、知識欲や学習意欲は旺盛な人達が多かった。

空腹を抱えながら、また、師範や旧弘高の教授達に叱咤激励されながら貧欲に知識を吸収した。当時の教育学部は、弘前公園の中の兵器庫を改造した赤煉瓦の建物で、外観は立派だったが、内部はお粗末であった。

しかし設備は不十分でも、講義は充実していた。入学試験の英語の時間、各教室を回ってデクテーションをしたI教授は、ダンディいかに英国紳士然とし

ており、歯切れの良い発言は今でも耳に残っている。

大きな体軀で太鼓腹の哲学者S教授は、時々ワイシャツがはみ出して臍が見えるということから「ヘソ哲」という仇名をもち、ヤスパースの実存哲学を得意としていた。

怒ると教壇で跳びあがるという伝説さをもつ「ジャンプ」ことドイツ語のK教授は、ゲーテやドイツロマン派の音楽、無季俳句のことを話し出すと、早口で捲し立て、講義を忘れて脱線し、止まるところを知らない。

日本史のM教授は、新井白石研究で有名であるが、見るからに謹厳、静かに教室に入ってきて、にこりともしない。

戦後間もない頃なので、戦前の日本のすべてが否定された時代風潮の真只中、敢然として日本古来の文化や伝統の良さを説く凜平たる勇氣には敬服した。

その風貌と挙措動作から、我々は「M天皇」という尊称をささげたのである。M教授と対蹠的であったのは、法学の

I教授である。戦後華々しく登場した民主主義、自由主義の旗のもと、新時代の法の精神について、説き来たり説き去る颯爽、かつ華麗な講義に、私達は感動し、酔い痴れたものである。

英語のH老教授は、ジョンズ発音辞典そのままの正確な発音を教え、和訳も的確無比、一点の誤謬も、曖昧さも許さなかった。まさに謹言実直、学問の道の厳しさを教えられた。英語学の講義は、

始、英語で口述し、私達は必死にそれをノートに筆記した。一切板書せず、難かしい綴り字は口頭で示す、という徹底振りであった。

その他にも、思い出に残る個性豊かな

教授が沢山いた。いずれも、その道に賭ける情熱と気迫にみちていて、忘れ難い人物ばかりである。

昭和二十八年に卒業して、すでに三十二年を経たが、英語の辞書と格闘し、柔道の稽古に明け暮れた学生時代の四年間、私の貴重な財産であり、エネルギーの源となっている。

現役の学生諸君も、勉強とスポーツに打ち込み、気迫と情熱をもって、何事にも積極的に挑戦してほしいと念じている。

・昭和二十八年 中学課程(卒)
・青森県アマチュアレスリング協会会長

昭和63年度予算

○収入の部

	予 算	円	備 考
終身会費	2,450,000		(7,000×350)
繰越金	250,152		
雑収入	3,000		
計	2,703,152		

○支出の部

総会費	120,000		
評議会費	200,000		一泊
支部活動費	300,000		30,000×10
就職対策費	600,000		県教委20万, 大学40万
教生対策費	250,000		実習協議会
祝儀	200,000		卒業パーティ, その他
会報費	200,000		7,000部
印刷費	50,000		徴集チラシ, 封筒等
通信費	30,000		
特別基金へ	600,000		
事務費	100,000		事務, 大学等
雑費	53,152		
計	2,703,152		

※特別基金額 18,340,778 (平成元年2月末現在)

「教育学部は変わっていませんか」と聞かれることがある。建造物のことを問うているのではないことはわかる。

「変わりましたよ」と答えると、そのあとの会話が続く。

県の教員採用試験の結果に、教育学部の変化の一端を覗くことができる…。

最近五年間の合格率は表 1 の通り、年々低下の傾向をたどっている。

また、平成元年度の採用については、表 2 の通りの内容になっている。

この数値は、県内でのものであり、他



教育学部 二〇の頃

技術科教授 佐藤 武 司

県の教壇に立とうとする学生の数は増加の傾向にある。

二十年ぐらい前まで、教育学部内での会話は、本州北端の津軽弁と八戸南部弁でできた。その後、北海道、関東、関西方面からの入学者も増々、国許へ帰って教師になろうとする学生も多くなって、標準語を話すことが標準になってきた。

同時に、国際化の波も打ち寄せるようになった。姉妹校にある米国テネシー大学マーチン校から、毎年、一―二名の学生が来学して交友を深めており、東南アジア諸国から二―三名の教員が、文部省

表 1

年 度	合 格 %
昭和 60	63.1
昭和 61	57.7
昭和 62	60.3
昭和 63	58.3
平成 元	52.2

表 2 平成元年内定候補者内訳

	受験者数	合格者数	合格率 (%)
小 学 校	148	93	62.8
中 学 校	62	21	33.9
高 等 学 校	10	3	30.0
養 護 学 校	6	1	16.7
計	226	118	52.2

の研修留学制度のルートで入学するようになってはいる。

新年度には、八名の留學生が教育学部の校舎内のどこかで、一生懸命に勉強している姿を見ることができ、英語、フランス語、スペイン語、ポルトガル語、タイ語、中国語などが、居ながらにして勉強でき、諸外国の人々の日本に対する考えを知る場所にもなろうとしている。

耳で聞き、目でみて変わった点をとりあげてみましたが、質的变化に気付くことがあ

る。新入生歓迎のコンパの席で、「何かの

クラブに所属し、一生懸命遊び、その後先生になるかどうかを考えてみたい」と自己紹介する学生がみられるようになった。正直で良いとも言えるし、何が目的で大学に来たのかな?と不思議に思うことがある。

「勉強しなさい!」と言われてなくなつても、何か物足りなさを感じているようでもあるし、自分の生き方を具体的に指導助言してくれるのではないかと期待しているようにも思われる。

教師になりたいから教育学部に入学した学生もおれば、自分の得点能力からみて教育学部が適当だったから受験したという学生など、様々なタイプの学生が雑居して面白い。

教育学部を卒業するためには、教育実習の単位が必要である。だから小学校、中学校で実習してみよう、という安易な考えで子どもの前に立つ学生も居ないわけではない。しかし、このような学生でも、教育実習という経験を通して大きく変容する。

「自信はなかったが、こんなに素晴らしい経験はなかった」と学生は語る。

少人数で共稼ぎの家庭生活、同年令の仲間達との学校生活の経験しか持たない学生達が、年令差の大きい子ども達に接触し、子どもは可愛いということを感じ取る。人間の心に触れて感動する。

教師になりたいと願うようになるのは、この時からである。

昔は、教育学部を受験しようと思った時点の事柄が、今は教育実習後へと移動したようである。態度が良くなり、適当に社交性も身につけ、積極的に行動するようにもなった学生達と会い、現場の先生達の指導技術に驚き、感謝したい気持ちになる。この欄をかりてお礼を述べさせてもらいます。

どうも有難うございます。

(昭和三十五年度卒)

編集後記

◇ 会報「あすなろ」も第十号を数えるに至つたが、内容の充実面からみると、どうも新鮮味がなく、マンネリの傾向がみられ恐縮している。

◇ 第一回卒業生で活躍している塚原良一氏から、貴重な学部発足当時の随想を寄稿いただき、感謝に堪えません。

また、同窓の佐藤武司教授から、学生気質というか、考え方などを含めての学生 の 状 況 を 紹 介 いた だ きました。今更ながら、今昔の感、ひとしおという感があります。

◇ 各支部の役員には、配布方について格別のご配慮、ご協力を賜りますよう、改めてお願い申し上げます。